

「こうち森林救援隊」の活動 女だつて木を切ります

「キコリ」に行ってくるき」

「キコリって何…?」

耳慣れない言葉に、頭の中をクエスチョンマークが飛び交いました。

聞くと市役所の中に人工林の間伐をしているボランティア団体があるとのこと。

林業なんてプロがやるもの、プロじゃないとできないものと思い込んでいた私には、身近な職員さんがやっていることが驚きでした。

私は山が好きで、雪のない季節は四国の山や時には日本アルプスを訪れます。行き始めたのはほんの最近のことですが、澄んだ空気、季節折々の可憐な花たち、吹き抜ける風、もちろん美



間伐により森に多様性が生まれる

味しいごはんやおやつに、のんびり癒される時間を過ごしています。

そんな山へ私にも何か恩返しすることができると、というのが「こうち



野町はる奈

高知市市民税課

【のまちはるな】高知市生まれ。1998年高知市役所入職。市民税課に在籍。「こうち森林救援隊」には2008年4月入隊。趣味は登山、スノーボード、お茶、お花など。身長153cm。

森林救援隊」に参加したきっかけでした。

「こうち森林救援隊って、何しゅつところ?」

高知県の森林率は全国一位の八四%。人工林の比率は六五%に上り、何と県土の五五%を杉や檜の人工林が占めています。

平成一七年一月には、高知市の中心部を流れる鏡川の源流域である旧鏡村・土佐山村が高知市に合併され、源流域から河口までが単一の行政区域におさまるといふ、全国的にも珍しい新高知市が誕生しました。この合併により高知市の森林面積は約三倍に増え、鏡川の清流を守っていくための森林整

平成22年4月10日植樹祭を開催。100名以上が参加



備や、源流域から河口までの一貫した環境整備などが緊急の課題として浮上してきました。

「こうち森林救援隊」は、こうした課題にボランティアの立場から何か協力できないものかとの思いから、この合併と時を同じくした平成一七年一月、

高知市の職員が中心となって立ち上げられたものです。

発足当初は一五名程度だった隊員が、平成二二年七月末現在では二八〇名にも増え、TOTO（株）や（社）国土緑化推進機構、（株）四国銀行などの企業からの支援も受けながら、月一回の定例会を中心に、森林環境の保全活動、間伐材の利用促進活動、植樹による啓発活動などに取り組んでいます。

（詳しくはブログをご覧ください。

「こうち森林救援隊」<http://kochi.koblog.jp/>）

チェーンソーで切るきね

「こうち森林救援隊」への入隊一日目。初めて持ったチェーンソーは手にずっしり。ようやくエンジンをかけると、ヴォーンと圧力すら感じる音に圧倒されます。

「バー（刃）の部分はカンナの原理だから、間違って触ったら肉がえぐられるよ。でも腰を入れて持たないと安定しなくて危ないから、もう一歩踏み出して。」だなんて、無茶を言わないでください！ ビクビクしながら玉切り（輪切り）ができた時には、カチコチの肩からドツと力が抜けました。

と思ったら、早速山へ。本当に私が切るんですか、という腰が引け気味の



間伐でできた隙間から青空がのぞく

私をよそに、隊長が意気揚々と説明してくださいます。もうとにかく無我夢中で、言われるままに切りました。ヘルメットをボンと叩かれて振り返ると、下がれと合図されています。あわてて後ろに下がって、かろうじて立っている木を、えいっと押します。すると切った場所を支点に、すうっと木が動き始めました。次の瞬間、ドーンッ、地響きをたてて、さっきまでどっしり立っていた木が横たわっています。頭上を見上げると、真っ暗だった樹冠にぽっかり穴が空いて、林床まで一筋の光が差し込んできました。

「ああ、間伐ってこういうことなんだ。」実感した瞬間でした。

上から下へ転がるで

山の仕事は力とコツが勝負。チェーンソーや燃料、重たい道具類を抱えて、

林内作業車やトラックを使って間伐材を搬出



「山道」ではない山の切り立った斜面を歩き、時にはチェーンソーを胸の位置まで持ち上げて木を切り、力づくで引き倒す。机の前に座ってパソコンを打つのは根本的に違う仕事のカタチがそこにはあります。

「こうち森林救援隊」では、間伐材はできる限り使いきる、をモットーにしています。切った木は当然山から運び出さないとけないわけですが、ここで驚いたのが生木の重量。水分をたっぷり含んでずっしりと重く、ちよっと押したくらいではビクとも動きません。

大きな木にはとても手が出ないので、細い丸太を一生懸命引きずっていた時でした。「斜面に向かって横にして押し

てみて。」言われてそうしてみると、あっさり丸太は転がっていききました。

考えてみれば当たり前のこと。小学校で習った「重力」です。間伐する時も木の「重心」をみて伐倒方向を決めると、「重力」に引かれるように思った方向に倒れます。また、密集した林内での作業のため、切った木が隣の木に倒れ掛かったら、木回しという道具で「梃子の原理」を利用して幹を回転させると、「重心」が変わって「重力」の方向に倒れます。

「重力って本当にあるんだ。」「コツツて重力を味方につけること？」知識と実感は別々のことなのだと、目からウロコの発見でした。

〴〵はるなちゃん、
みそ汁薄いけんど〴〵

「こうち森林救援隊」の定例会は、月に一度、土日の二日間をかけて行われます。拠点となる梅ノ木公民館は、元は小学校であったのを宿泊できるように改修された施設です。

一日目の作業が終わると、ゆつくり汗を流した後、さあ楽しみなのが交流会です。

高知のビール個人消費量は日本一。冷えたビールで乾杯するところから、長い長い夜が始まります。

昼間は班ごとに作業をしていますし、

気を緩めると危険なことも多いのでゆつくり話す余裕がないのですが、その分交流会はにぎやかです。地元の方も飛び入りで参加してくださって、鏡川のとれたての鮎や美味しい野菜をいただくことも。活動が地域に受け入れてもらっているんだな、と感じられる嬉しい瞬間です。

高知のお客（宴会）では席はあってもないようなもので、ビールや酒瓶を片手にウロウロ、あちらこちらで笑い声が弾けます。お酒好きの土佐人ならではでしょうか、お客をすると仲間との距離がぐっと縮まります。昨日まで初対面の人でも、朝起きた時には身内も同然。救援隊の団結力は、交流会のたまものなのかもしれません。



交流会はいつも賑やか

間伐材で作った木工製品を販売



何分人数が多いので、料理は皿鉢（高知の大皿料理）のほか、冬は鍋、夏はバーベキューが定番です。私もここぞと腕を振りたいところですが、料理もやっぱり先輩隊員さんを先生に勉強中です。結果、見事一〇人前の鍋は作れるようになりました。…が、二人分はどうやって？先輩隊員たちから「次の目標だね。」と言われていきます。

そんなある朝、目が覚めると女性隊員は私一人。みそ汁でも作ってみようと張り切ったものの、お味噌をこれでもかと入れても入れても薄味のまま…。しよ、精進します！

肥後守（ナイフ）が必需品やったわえ

間伐材を使った木工は、公民館の運動場が作業場になります。真夏は太陽がジリジリ照りつけて、日陰なんて当然どこにもありません。

そんな時、あちこちにブルーシートを結びつけて、あつという間に即席屋根を作ってしまう隊員さんたち。結ぶところがなければ、竹や木切れを組んで柱を作り、見事なブルーシートテントを立ち上げます。

部品のそろった製品としての「テント」ではなくて、ただのブルーシート、ただの紐、そこから辺から切ってきた竹。あるものを組み合わせるだけで、何でもできてしまいます。まるで魔法のようです。

ある時、マイ箸を作ろうとして檜の木切れを一生懸命細く削っていたら、「刃物は腿の上で固定して、削る物の方を動かさないといけないよ。」と言われて驚きました。えっ、削る物を動かすの？「昔はおもちゃなんかなかったから、肥後守で何でも作っていた。いつでもポケットに入っていたよ。」と言われて二度ビックリ。

刃物と言えば「危ないもの」。使う時には場所を選んで、目的のこと以外には決して使わないように言い含め

られてきたはずでした。なのに、つい最近まではむしろ逆で、遊びの中でも手になじむほど使い込むのが当然だったと言います。

普段の生活では、スイッチを入れれば動く「機械」があるのが当たり前です。使い方だけ知っていれば何の問題もありませんし、むしろ使い方に精通することが最優先です。そんな生活の中で、一つ上の世代までなら当然知っていた、道具の使い方であったり、工夫をすること、知らないことすら知らずに過ぎてきてしまったように思います。

「できるけれど使わないこと」と、「できないことにも気づいていない」のは大違いです。もしも電気が止まったら？災害が起きたら？にわかに不安になりました。

「うち森林救援隊」の隊員は、大学生から八〇代まで、市役所だけでなく民間企業や自営業、そのOBまで、年齢も職業も様々な方で構成されています。それぞれ経験豊富で独自の哲学を持った方ばかり。救援隊の世代を超えたつながりは、知恵や知識を伝える役割も果たしてくれています。

予測できることで、事故は起こらんがよ

山での作業は、当然ながら危険が伴います。危険を避けるためには、正し

女性隊員増加中！



い道具の使い方を身につけ、状況に応じた確な判断が必要とされます。

今からこの木を切る。重心が思いのほか偏っているかもしれない、倒した時に岩にあたつて根元が跳ね上がるかもしれない、後ろに下がるためのスペースは確保できているだろうか、周囲の人の位置は…予測することができれば対応を考えることもできます。

これは日ごろの仕事の中でも同じなのでは？ 事務仕事の場合、注意を怠っても命に関わることは稀かもしれませんが、常に対応を考えながら仕事をするのは、市民サービスの向上へもつながっていく、大切なキーワードだと思います。

〳雑魚寝やけど、かまん？〴〵

意識はしていませんでしたが、事務局長によると、最近は女性隊員が増えてにぎやかになってきたそうです。

自分が参加して楽しかったこと、驚いたこと、感動したことは、ついつい人に話したくなります。一緒に行ってみない、と誘います。すると不思議なことに、男性は誰一人行きたいと言わないのですが、むしろ女性が興味津々。知っている人がいて、同じ女性がいれば参加しやすいと感じるのかもしれない。この「一緒に」が大事なのかも。

間伐をしたい人は少数派だとは思いますが、同じ職場から女性ばかり五人参加しているのは、まさに「一緒に」効果なのかもしれません。

宿泊してのフル参加になると、寝袋で雑魚寝になつてもう少しハードルが高いうですが、「雑魚寝でもいいよ。」と言った友人もいるので、まずは熱く語ることが肝心なようです。

〳木に手を合わせなさいよ〴〵

森を守るのに必要なこととはいえ、木を切るという作業は、一つの命を断ち切ることであります。自分より長く生きた木を倒すことは、本当はすごく覚悟のいることです。「ありがとう。ちゃんと使うからね。」心の中で手を合

わす気持ち、決して忘れたくはありません。

山のために始めたボランティアだったはずが、今では自分がもらったものの方が多いというのが実感です。土を踏みしめてホッと、人とながつて笑い、知恵を継承して感動する。またその活動が、山を守り、川の環境を整え、海の生き物を豊かに育む。

始まりは、たった一本の木を切ることに。それが自分を含め、広範囲に渡って連鎖を起こしていく。そんな活動に関わることができたことに心から感謝しています。

環境問題に関するキーワードは数あれど、改善へのスタートは、実はほんの小さなことであるように思います。私も自分にできることを、一つずつ見つけることから始めたいと思っています。

まずは声を大にして、
「一緒にキコリ、やってみんな？」

